

短信

## 茨木市PTA協議会で差別事象に取り組んで

安孫子 浩子

### はじめに

二〇〇五年度茨木市PTA協議会（以下、市P）でのPTA活動中に、同和地区を意識した差別発言があり、その事象を巡って一年間取り組みをしてきた。

今この一年を振り返ってみると、PTAという場に出会い、つながりを持ち、「仲間」となった私たちの絆を再確認する機会であったと思う。それは「本当の仲間」とは何なのかを改めて考えさせられる「試練の一年」でもあった。「試練」と表現するほどに社会にまだまだ根深く「差別意識」が存在することを直視させられ、これまでに「仲間」として当たり前に、それぞれ仲間のありがたさに幸せを感じて過ごしてきた私に、様々な人びとの裏の想い突きつけられた一年だった。この場を借りてこの一年での私の想いを改めて考えてみようと思う。

私は現在、市Pで会長をしている。市内六〇校・園が所属する単位PTAの上部組織である市Pに関わって今年で七年目になった。こんなに長く続けていられるのも宝ともいえる仲間たちとの出会いがあったからで、その仲間に支えられて今NPO活動までしているという毎日がある。仲間のありがたさを一番に享受しているのは他でもない私自身だと胸を張っている。

小・中学校は同和地区を抱える「同和教育推進校」で学び、中学校教諭をしていた時に同和教育推進校での勤務経験もあり、同和問題を身近に考える機会を多く持つことができる立場で暮らしてきたのだと改めて思う。

### 部落問題への出口

私が一年生で転入した小学校が「同和教育推進校」だった。そこで「寝た子を起こすなは間違っている」「狭

山事件は冤罪だ」などの言葉を聞かされて育ってきた。その頃は話の中身がよく分からないままであった。中学校でも引き続き同和問題の学習会が取り組まれていたが、同和地区の子どもたちが同級生に知っているのは中学生になってからである。

中学三年生のときだった。ホームルームでの部落問題学習会で「家族から部落に関してこれまでのイメージや聞いてきたことを聞き取って発表するように」という課題が出された。その結果をみんなで黒板に書き連ねた。長年にわたる差別と偏見の言葉が書き連ねられていた。そのときの私は「みんながそう言うなら、それは事実なのかもしれない。嘘がこんなにたくさん広まるわけはない」と思っていたのだ。そのことを放課後仲の良い友人に口走ったときのことだ。黙って聞いていた友人が私の言葉の後に「あのね、私は部落やねん。それ知って、私と友達でいるのをやめる？」と聞いた。真っ直ぐな眼差しで彼女は私を見つめていた。これまで彼女とは本当に仲良く、一緒に過ごしてきたのに何も気がつかないままだったことの恥ずかしさ。私の言葉に、そして黒板いっぱいを書き連ねられた文字に、どれほど彼女が傷ついていたのかを思い知ったのだ。「友達やめるわけないやろ！何の関係があるの！」と私は言って彼女と抱き合っ

泣いた。何も知らなかったがゆえに平気で人を傷つけていた私が、彼女のカミングアウトによって初めて目を開かされた重い体験だった。

## P T A 活動との関わり

P T A 活動というと「関わらざるをえないから仕方なくやっている」という場合がほとんどではないだろうか。私は子どもが三人おり、幼児を抱えている間は学級委員などクラスの一委員は引き受けても、P T A はじめ地域の役職は免除されてきた。さすがに末っ子が幼稚園の年長児になった年にはいよいよ自分の順番が来たと覚悟して、幼稚園 P T A 会長を引き受けた。たまたまその年、「市 P」の役員が当番でまわってくる当たり年になっており「市 P」がいったい何かも分からないまま引き受けることとなった。

最初は「一年間頑張れば義務は終了する」と思っていたが、今年七年目に突入している。何がそうさせたか。ひとえに「人との繋がり」というその一点に尽きる。大人になって、新たに人と出会う機会がほとんどないなか、ただ「子ども」を介した大人同士の繋がりがこころも貴重なものになろうとは、その時には夢にも思わなかった。

## 市P（茨木市PTA協議会）のつながり

市Pの役員は月一回の役員会に集まり、それ以外はそれぞれ自校・園での各単位PTA活動を日々続けながら、各自当て職といわれる市Pとしての対外的な分担や委員会活動を担っている。その分担は前年度のメンバーが置き土産として割り当てるのだが、それが新たな出会いの始まりでもある。いきなり出会った他校・園のメンバーと一緒に活動が始まるのである。

私が出会った市Pのメンバーは、月一回の役員会で議事話し合った後で折々の疑問などを気軽に話し合い、「学校教育について」「子育てについて」など、会議室を時間切れで追い出されるまで話し合いをすることがよくあった。このことはとても新鮮で、違った視点からの意見は新しいアイデアを思いつくのにとっても参考になったし、こんな機会をもてたことがとてもありがたいと感じていた。メンバーそれぞれが各校・園で会長、副会長をしている人びとだけあって、とても前向きな姿勢であり、おたがいの提案に対して「この部分なら手伝えるよ」とか「こうやったらもつと楽しくやれるよ」など意見が出てくるのである。このような意見交流が重ねられるなか

で、単に月に一回顔を合わせるだけの関係でない、新たな取り組みが生まれる素地ができあがっていったのだと思う。そして、その仲間のなかに同和地区の被差別当事者がいたという事実には、今はいまじみと感謝をしている。ここでの出会いがなかったら昨年の取り組みはできなかった、そう思うと私たちの繋がりがいかに偶然であり、はたまた必然であったのかと感じざるをえない。

市Pの一年間の取り組みといえば、「例年どおり」の行事を毎年繰り返すのが通例だが、この年から少しずつ変わっていき、新しい取り組みが多く取り入れられるようになった。オーストラリアのジュニアハイスクールとの交流から始まったホームステイの受け入れや、学校五日制完全実施の開始に伴って、「子どもたちの土曜日の居場所をどうするのか」を考えようというPTAの声に呼応して、どう取り組めばよいのかを考えるプロジェクトチームを立ち上げた。また「人権」を考える取り組みとして「人権フォーラム」が開始された。これらの取り組みが茨木市内全域に多くの仲間を繋ぎ合わせていく大きな原動力になった。

今必要なことを形にして取り組んでいこうという役員会での提案に対し、それまでいろいろな問題について話し合ってきた問題意識の共有化が図れていたこともあ

り、新たな取り組みを受け入れられる度量がこの年の仲間にはあったのだろう。それが新しい一歩であり、その先に続くステップアップの始まりだった。

### 人権フォーラムの取り組み

一九九九年度末の市P総会で「環境浄化委員会」が「人権環境委員会」に改名された。そのネーミングから分かるように、これまでは「人権」の視点はPTA活動に位置づいていなかったのだ。「人権」をPTAで取り組むようになったのには、同和地区の仲間がPTA役員となって総会で発言し、訴えかけたことが大きい。ある意味、PTA役員は地域の機関・組織（公民館・福祉員会・自治会など）活動への入り口、地域での名誉職への登竜門ともいえる。そこに社会的な弱者や被差別当事者への視点はほとんど皆無に等しいといえるだろう。

「人権フォーラム」は、茨木市内を東西南北の四ブロックに分け、ブロックごとで取り組み形をとった。形式は舞台発表である。「人権がテーマなら内容は何でもい」という市Pからの提案であったため、ブロックごとにどう取り組むかの話し合いを重ねるしかなく、何から手をつけたらよいか疑問と不安だらけだったが、これ

までの単位PTA内だけの活動を越えて、他校園のPTAと連携を取りながら企画から進めていった。子育ての悩みを寸劇にしたり、難聴児のいるブロックでは手話コーラスに取り組んだりした。子どもたちも一緒に「いじめ」問題の劇を披露するところや、教員と中学生の討論会を実施して子どもの生の声、教員の思いをぶつけ合ったところもあった。劇では女装や男装の役者が出演したり、歌あり踊りありで、芸達者な保護者の生き生きした顔が多く見られた。初めはブロックごとに体育館で開催していたものが、最終的には市民会館で一堂に会して会場を満員にするほどの取り組みへと発展していった。

これまでの「市P」の取り組みといえば、役員会が企画した行事に各単位PTAに動員をかけて講演会等を作り立たせるといやり方だった。それは各単位PTAだけでは取り組めない費用のかかる講演会等を実施するにはとても有効であるし、頼まれて嫌々参加したPTA会員に、結果として「来てよかった」と思ってもらえる機会になるのなら、それもまたよいことかもしれない。しかし、それはあくまでも「お客さん」としての参加であり、主体的な参加の場合とは参加する思いの強さが根本的に違う。その点では「人権フォーラム」は終わった後に「やってよかった」という充足感が得られ、高校時代

に学園祭や体育祭で頑張った時を思い出したという感想を多く聞いた。一緒にしんどさを分かち合った仲間とは心の絆が強くなるのは当然といえれば当然だろう。

人権フォーラムは一九九九年から六年間続いた（人権の取り組みは今年度も、「子どもの安全」をテーマに人権フォーラムの手法を取り入れた市P大会の開催、人権環境委員会での人権に関する一〇回の連続講座に引き継がれている）。つくり上げる過程で浮き彫りになった各学校やプロックの課題を一緒に議論したり、「うちではこうしている」とアドバイスし合ったり、それぞれの実践が交流されていった。人権フォーラムをつくり上げる過程そのものがPTA同士そして人と人とを繋ぐ実践となったのだ。

最大の課題であった「人権」については、人権フォーラムを通して人と人がつながることが「人権そのもの」であったという気づきに達することができた。人と人との繋がりを得られたことで、ともに人権問題を考えたいこうとする素地を手に入れることに成功したのだ。

人権フォーラムが終わってからは、「くだけすぎでこんな形は『人権』と呼ぶのにふさわしくない」などの意見が多々寄せられたが、それは机上学習としての「人権」学習が本来のものであるという意識からきたものだろう。しかし、繋がりがあればこそ、人は他人の痛みを自

分のものとして考えられるのではないのかと今思う。

繋がりの持てた仲間の悩みは自分の悩みであると思える関係。こんな人権フォーラムができたことを誇りに思う。PTAでの取り組みが人と人を繋ぎ、そこに生まれた「仲間」意識には、もはや相手の属性に対する「偏見」が入り込む余地はなくなっていた。人の「属性」を見るのではなく、すべてを含んだその人自身とつき合っているから。この「意識」を皆が持てたから昨年の取り組みができたのだと改めて実感している。

### 差別事象に直面して

昨年度のある委員会活動の中での出来事だった。グループごとに分かれて各PTAの取り組みについて話し合っている時に、「〇〇中学校って荒れているんでしょう?」「どうして?」「△△小学校（同和地区がある学校）の子がいるから」「それはどういう意味ですか?」「これ以上言ったら問題になるから」という発言が起こった。「同和地区が特別な地域だからだ」という意味であると、その場にいた保護者たちは認識した。そして「その発言はおかしい」と一人の保護者が発言してくれた。とても勇気が要ったという。

PTA活動のなかで「差別発言があった」と初めて聞いたとき、「大事な仲間のために、いったい私には何ができるのだろうか、どうしていったらよいのだろうか」という思いで頭がいっぱいになった。胸の中には悲しみと被差別当事者である仲間の顔が浮かび、これまでの取り組みや繋がりで得たものがあるがゆえにPTA活動内ではこのような問題は起こるはずがないと勝手に信じ込んでいた自分自身に気がついた。

この「発言」のあったその場には、被差別当事者はいなかった。けれど、その場において、その発言はおかしいと指摘する保護者がいてくれたからこそ、そこからこの事象への取り組みが始まったのだ。「その場に被差別当事者がいない」というケースはとても珍しいことだと後から指摘された。そういう場でも、おかしいことは、おかしいと言える意識を持つ人がこれまでのPTAの取り組みの結果として生まれていた、ということだろう。

今回取り組みを進めるなかで、人びとがどのような意識で「同和問題」を捉えているのかを度々聞く機会を得たのだが、その認識があまりに市P内部と違うことに愕然とするばかりだった。私にとっての当たり前がなかなか通じなくて、また、市Pの仲間なら「そんな発言をしたら被差別当事者が傷つく」と思うことを平気で言う人

も現れて、悲しみをいっぱい引き受けなければならない場面に多く出合った。何ゆえに悲しかったのか。それはやはり「仲間」が傷つくと感じるからだと思う。

### 取り組みの経過のなかで

この事象を聞いて「何ができるのか」と考えた私だったが、実際に最初に動き始めたのは「行政」だった。私にしてみれば「なぜ私たちの内部で起こったことに私たち自身で取り組みをさせてもらえないのか、なぜ最初に行政が動くのか」と、とても疑問だったし、いらだちを覚えた。「第三者として行政が動かなければ、誰がこの事象を差別発言であると決めるのか」と問われたとき、「何ゆえに行政が差別発言であると決める必要があるのか。その発言で誰がおかしいと思ったり、傷ついたりすることがあったのなら、それだけで十分謝罪する理由になるはずではないか」と思ったのだ。なぜそのような段取りや手続きを踏まないと前に進まないのかが理解できなかつた。正直いまだに納得できていない部分がある。これまでの差別事象をどのように解決（？）しているか。これまでの方の表現の方が正確かもしれないが、してきたのかという歴史的な経過を知るうちに、運動団体

による糾弾が「このことは差別である」と突きつけ、差別事象の関係者間の話し合いだけでは解決がつかないのが行政が動くしかない状況があり、最終的には「今後このようなことが起こらないように行政が市民向けに啓発をする」ということで収束が図られてきたのだということや、運動団体の糾弾で責任追及されることを恐れる行政がいち早く動き、事態の収拾のための事情聴取や謝罪の場を設定したり、一方で、差別発言者が追及を逃れるために政治的な影響力を使ったりするということが、うつつらとではあるが見えてきたことも事実である。私にとっては「仲間」への思いだけが、この事象に取り組む原動力だったが、世の中はそんなに簡単には動いていないということなのかもしれない。

それでも、PTAで起こったことだからPTAの中に解決の糸口を求めたいという私たち市PTA役員の願いもあり、何度も話し合いを重ねた。時にそれは私たち役員それぞれが「同和問題」をどう考えて生きてきたのかを語る場となり、涙ながらに自分たちの思いをぶつけ合い、話し合い、互いの絆を更に深めていったように感じる。多くの仲間たち（直接PTA活動を中心に行っている立場でない人たちも）が、日々この事象で奮闘し走り回る私を心配して見守り、様々に協力してくれたことは感謝

にたえない。けれども、そのなかで最大の出来事は、部落出身を隠して同和地区外で生活している人の、それも個別に三人の、「実は…」というカミングアウトに出合ったことである。そのことは最大の驚きであり、なぜ私に話してくれるのかと、ひた隠しにしてきたその深く重い事実をどう受け止めていけばよいのかと悩みながらも、一つの大きな決意に至った。「私の大事な身近な仲間だけでなく、こうして重い悲しみを抱えながら暮らしている人がきつと他にもたくさんいる。私は彼らを裏切りたくない、何があっても、『おかしいことはおかしい』と声を出し続けよう」そう決意した。

カミングアウトを受けたのもまた、これまでの活動のお陰で、仲間としての絆が人と人の間に重い事実をも共有できる関係をつくり上げていたからだと思う。受け止めてもらえるという安心感がなければ人は辛さを話せないだろう。私自身に受け止めるだけの度量があるかどうかは別として、確実に「裏切るまい」と決意できたのは事実である。逆に、このことを通して、私はまた一歩階段を上る機会を与えてもらったのかもしれない。

差別事象への取り組みを、PTAの一年の重点課題としてPTA大会のテーマや広報紙の特集にも取り上げ、フィールドワークなどの取り組みも始めた。市の啓発冊

子にもPTAの動きを取り上げてもらった。しかし、それらの動きを「よし」としてくれる人びとばかりではなかった。なぜPTAでこんな取り組みをするのかという批判をたびたび受けた。「あのくらの発言で…」「発言の中にハッキリした差別の言葉はあったのか」「発言した本人は差別だと認めているのか」など本当にいろいろ言われた。けれども、批判を受ければ受けるほどに、私の中には「仲間を裏切るまい」という思いだけが深く大きく強くなっていった。PTAの会議の場ではそこにいる私たち自身が踏ん張らなければ、いったい誰がカミングアウトしてくれるだろう。カミングアウトできず黙ってこの様子を見ながらもきつと同じ気持ちでいる人、あるいは日々「出身がいつばれるのか」とビクビクしている人たちの立場にどうしてなれるだろうかと思いつけていた。時には声を荒げたこともあり、マナーに反する失礼なことをしてしまったと反省しきりでもある。

## 今更(いまさら)

逆に今、差別発言をした人のことを思うと、どこかで「しまった」と気がついていたらかもしれないと思う。最終的にその人の思いを受け止める機会を持てなかったこ

とは、とても残念である。取り組み方として個人を特に責めたてて追及しようとしたわけではなく、PTAで起こった問題をみんなと一緒に考えていこうというスタンスでフィールドワークや学習会に取り組んだ。私たちに考える機会を与えてくれたことを逆に感謝しなければならぬとさえ思っている。私たち自身がいつの間にか人を傷つけていることもあるし、その人の抱える深い悲しみや心の傷を知らないままに、否、知らないがゆえにいつの間にか傷つけていることがあるのだと考えなければいけないと思ひ知らされた。人は、受け止めてもらえないという安心感がなければ、どんな心の痛みがあるのか決して口には出せないだろう。この人なら、この仲間なら、話して受け止めてもらえるのだという気持ちになれるには何が必要なのだろうか。被差別当事者である仲間が「これまで、この問題は自分ひとりで考えてきた」と話したときの私のショック。なぜ誰にも相談しないのかと思つたとき、相談しても受け止めてもらえないのかと考えたら、被差別当事者に対していかに世間の風が冷たいのかを考えさせられた。今回のことで、PTAを通して得た「仲間」の間でも、これまで本当に心の中の思いをぶつけ合ってきたはいなかったのだと知った。被差別当事者である仲間が生い立ちのなかで受けた差別の実体験を六年間



の付き合いのなかで初めて聞かせてくれた。これまで聞かなかったから聞けなかったのか、ことさらこの問題を取り上げて話すこともなかったし、彼らの生き方としてそれを含めて今を生きているのであるから話す必要もなかったのか。けれども、話しても大丈夫だと信じなければ話せないだろう。

今回の取り組みのなかで話せる繋がりがもてたこと、また繋がりを深め合えたことで、多くの人びとのこれまで秘められていた思いを聞くことができたのだと思う。それは「決して裏切るまい」という決意なしには聞けないことではあるが、そんな繋がりをもてたことは人生のなかで大きな宝であり、私にとって「生きる力」になった。今回多くの人びととこの事象について話す機会を得たが、「本当のことを知らない」と、「憶測・噂だけで判断する」との怖さを持った。人間そのものを見てつき合っていたら決して起こらないはずの言動が実際には起こるのは、本当のことを知らない場合だけでなく、自分が優位に立ちたいがために本当のことを知りたくない場合もあるということにも、気がついた。社会の中で劣位に置かれたくないという感情は（私にとっては「馬鹿馬鹿しい」としか思えないのだが）生き難い現実社会の反映でもあると思う。

差別事象はなくなるのかと、ときどき話すことがあ。社会から完全になくなるかどうかは分からないが、少なくとも私の周りの仲間のなかには「差別がない」というよりも、繋がりがあから、問題が起こっても話し合えるし理解し合えるという自信がある。悲しい思い辛い思いも一緒に受け止めて考えられるという繋がりが持てたと思えるからだ。

差別の壁を乗り越えるのはやはり「人」なのだ。人は一人では生きられないのだから、どんな仲間や繋がりを持つか、持っているかということが人生の深みになるような気がする。

このような体験をぜひとも子どもたちにもしてほしい、正しく人を見る目を持つてほしいと願っている。大人の繋がりが子どもを守り、育んでいくはずだ。私たちが得たようなつながりの持てるPTA活動を続けていきたいと思いつながら、そう簡単にいかない現実には悩みが尽きない。でもそれが人の生きる毎日なのだ、それもまた楽しいと思える私である。それもこれも「一人じゃない」という心の支えがあるからだと思う。私の周りにいて支えてくれるすべての人に（そしてこれから出会う人たちにも）心からの感謝を届けたいと思っている。今後とも深い長い繋がりを願って。